

備えあれ!

(「テサロニケ五・一〜一一」)

去る者は日に疎しと言うが、去る事もまた然り。世界を震撼させた九・一一も日本中を悲しみに染めた三・一一もその記憶は段々と色あせていく。そうなるにあれほど言われていた防災対策も何かおさなりになつてしまふのだが、そうなつてはいけないと警鐘を鳴らしている記事を見つけた。題して「東海地震発生の切迫性」、要は「東海地震はいつ起こつてもおかしくない」というのである。そうなければ「その日」のために水や食料を備えるのは当然のことになる。

閑話休題。前段において再臨の情景を描き出したパウロは次にその再臨への備えをするようテサロニケ教会のクリスチャンを励ましていく。いつ起こるかは不明だが、いつ起きても不思議ではない、切迫した再臨にどう備えるか。これは今を生きる我々にとつても大切なメッセージである。

一、醒めた目を持つ

突然やつてくる再臨。それは我欲に溺

れ主を侮る人々に正義の鉄鎚が振り下ろされる時である。しかしキリスト者は恐れる必要はない。なぜなら私たちは既に光の子どもとされているからである。とはいえだからといって霊的惰眠を貪り、怠惰な暮らしをしていてよい訳がない。むしろ恵みによつて闇から光へと移されたものであるからこそ私たちはその光の中をあゆみ続けなければならないのだ。また六節、八節において「慎み深くする」と訳された言葉は原義では「しらふ」である。実際こゝろが七節との関連はより明瞭になる。深酒は人間の理性を暗くさせ、制御不能の状態に人間を追い込む(箴言二四・一九以下)からである。パウロは一度光を受け、御霊によつて制御されるようになったキリスト者が再び混乱に陥らないよう、醒めた、素面の目を持ち続けることの大切さを解いたのである。

二、光の武器で身を固める

八節においてパウロは昼の者であるキリスト者に信仰、愛、救いを武器として身につけることを勧めている。この比喻はパウロがよく用いた比喻であり、類似の記事をローマ一三・一二やエペソ六・一一以下に見ることが出来る。だがどの武器が具体的に何を示しているかといつてい

上に大切なのはこの手紙の中に書かれている武器は全て防具であるということである。パウロは信仰の戦いの最前線に立つ勇士であった。だから信仰の戦いの背後には霊的な勢力があることをよく知っていた。またその戦いは本当に激戦だった。だからこそパウロはこの苦難を共にしているテサロニケ教会に対し、不用意に対峙して打ち破られないよう戒め、信仰、愛、救いの文字通り完全武装で勝利へ歩み、救いを完成するよう励ましているのだ。「備えあれば憂いなし」なのだ。

三、励まし合つて教会を建て上げる

パウロが語つたもうひとつの再臨への備え、それは互いに励まし合い、徳を高め合うこと(一一節)であった。よく私たちは「信仰は個人のものだから、」と云う。確かに信仰は個人と神との生きた関係であるから「個」を意識することは重要である。しかし聖書は同時に私たちキリスト者を「キリストのからだ」の肢体(一三節)として理解している。だとするならば全てが自己完結、「私は私、あなたとは関係ない」といった信仰は問題である。むしろ私たちはキリストのからだに結び合わされたものとして、兄弟姉妹たちと励まし合うことこそ求められているのであり、私たちは究極の勝利を目指す神のチームな

のだ。更に一二節の「徳を高め合う」と訳されることばの原義は「建てる」である。レンガ造りの建物を思い出してみよう。それぞれ個別の石が互いに支え合い、組み上げられ、全体の建物が構成されているのではない。同じくこの終末の世にあつて私たちは一層励ましあいながら個々人が、そしてバベル全体が成長・発展していくことを目指すべきなのである

* * *

今静岡では東海地震に備えた各種の津波シェルターの設置が人気なのだ。思うにそれを購入し設置した人はこう呟く筈だ。「うむ、備えあれば憂いなしだな」と。翻つて再臨について考えると、再臨は東海地震にそっくりだ。「いつ来るかはわからないが、それは必ず来る」という切迫したものなのだ。だとすれば「いつになるかわからないから」とは言つて備えないの問題だ。具体的な準備が必要なのだ。しかしそれは早まつて冬服を捨てて、保険を解約することではない。私たちの備えは何よりも霊的にしらふであり続け、信仰・愛・救いで心を守り、共に励まし合つて教会という救いの船を建てあげることにより、一人でも多くの人をこの救いの船に導くことである。アーメン。